

必修科目（体育・英語）に対する学生の意識調査

村山 勝*¹・郷司正彦*¹

University Students' Perception of their Junior and High School Subjects
—A Pilot Study for Future Research of Physical Education and English as Required University Subjects—

Masaru MURAYAMA and Masahiko GOSHI

Abstract

A questionnaire was administered to twenty-seven freshmen at the Tokai University School of Marine Science and Technology as a pilot study to find how they perceive the subjects they took previously at their junior and high schools. The results will be used for future research to investigate the effects of two subjects, physical education and English, which are offered as required subjects at Tokai University.

The students were asked to rank their favorite subjects and least favorite/weak subjects in both junior and high school. They were also asked to rank subjects they would like to do over if they could. The second part of the questionnaire, using a four-point Likert scale, asked the students whether they like, and are good at the two required subjects they are taking at the university. On the Likert scale they were also asked if they like sports in general and English as a foreign language. The students were invited to write their opinions as to how useful the subjects they learned at their previous schools are at present, and how useful physical education and English will be in the future.

The results of the study will be used to create a new questionnaire to investigate whether or not student beliefs about the two required subjects and the university's intentions for the subjects concur.

1. はじめに

今日、入学してくる学生が初めて直面する困難の一つに、高等学校との履修システムの違いがある。高等学校では、学習指導要領に則った科目群を履修するため、そのほとんどの科目が必修科目である事に対し、大学では必修科目と選択科目が混在し、自ら時間割を組まなければならない。本学を例にとると、新入生はカリキュラム説明、履修方法、学生生活上の注意等を1週間程度のガイダンスを受けた後に履修登録し、授業に臨んでいる。こうした短期間でのガイダンスを考えると、学生が履修に関する諸項目、特に必修科目を履修する必要性について理解不足を起こしている懸念があるといわざるを得ない。初年次生にとって、専門に必要と思われる科目群が必修科目である事に理解は示しても、履修すべき多くの「教養教育科目」の中で、なぜこの科目が必修なのか？または、なぜ選択科目であるのか？の理由を、正確に理解する事は難しい。特に必修科目

について、「必修にしてまで履修機会を与える意味は何か」を、学生が正確に理解しているのかについては疑問が残る。さらに教員の立場からも「学生達が履修した必修の教養科目が、卒業後どのように生かされているか」について、率直な意見を聞く機会は少ない。

著者が所属する清水教養教育センターでは、基礎科目（数学・物理・化学・生物・情報）、課程資格、総合教育、体育、および外国語の5つの科目群を担当している。このうち基礎科目は主に3・4年次における専門科目へのスムーズな移行を可能にする教育、課程資格は教職や学芸員資格取得等のための教育を扱っている。これに対し総合教育、体育、外国語の分野は人生の生き方を学ぶ、人格形成を助けるというような学生の将来に有形・無形に結果が現われる教育と捉えることができる。

本研究における最終的な目標は、本学の卒業生が必修科目としての体育・英語が、彼ら自身の将来においてどのような意味を持っているか、これらの科目がどのような形で活かされているのか、また活かされていないのかについて

2015年10月29日受付 2016年2月5日受理

* 1 東海大学清水教養教育センター (Liberal Arts Education Center, Shimizu Campus, Tokai University)

調査し、「必修科目」について生涯教育としての観点から、その意味を計る事を目的としている。そして教養教育を行う上で、どのように教授する事が学生達の将来のためになるのか、を考える一助としたい。

本稿では、この研究の第一段階として、本学の2つの必修科目である体育と英語についての予備調査を行った。2014年度海洋学部入学生が「中学および高校で学習した科目について、どのような意識を持っているか」、そして「現在履修している2つの必修科目（体育・英語）が、将来どのように役に立つと思うか」についてアンケート調査を実施したので、その結果と考察を報告する。

2. わが国の大学における教養教育

1987年、日本の高等教育の基本的な在り方を審議する大学審議会が創設され、1991年にその答申「大学教育の改善について」が出された。この答申後、同年大学設置基準は改正され、大学設置基準の大綱化によって一般教育と専門教育の区分、並びに一般教育の科目区分（人文・社会・自然、外国語、保健体育）が廃止されることとなる。そして各大学は四年間の教育課程の編成を自由にできるようになり、その結果、多くの大学は専門教育中心の改変にシフトして行くこととなる。

中央教育審議会の答申（2002）によれば、大学における教養教育は「社会の中での自己の役割や在り方を認識し、より高いものを目指していくことを意識した知的訓練の中核を占めるもの」としている。そして今後の教養教育のあり方を「新たに構築される教養教育は、（中略）専門教育への単なる入門教育ではなく、専門分野の枠を超えて共通に求められる知識や思考法などの知的な技法の獲得や、人間としての在り方や生き方に関する深い洞察、現実を正しく理解する力の涵養など、新しい時代に求められる教養教育の制度設計に全力で取り組む必要がある。」とし、これまでの各大学による専門教育中心の改変を見直すよう求めてきた。

こうした各審議会の答申を背景に、教養教育に関する研究がなされ、林（2004）は「今後各大学が独自に共通（教養）教育とは何かとの問いかけを十分に吟味したうえで、明確なヴィジョンの下で教育課程を再構築する必要がある」としている。また福田（2010）は、「教養教育は専門的分野の理解を助長し、究極的には豊かな人間性を涵養するものでなくてはならない」とし、専門教育を中心としたこれまでの教養教育軽視を批判している。そして本研究の対象となる教養教育科目の体育及び外国語教育に関して、森田ら（2011）は体育と英語を融合させた授業を実践し、その授業に対し考察を加えた。また「大学の理念や時代状況に応じて常に検討されるべきものであり、また多様な大学体育、外国語教育が展開されるべきもの」と結んでいる。

3. 東海大学の教養教育

東海大学の目指す教養教育は、創立者松前重義博士が掲げた次の4つの言葉が礎となっている―「若き日に汝の思想を培え 若き日に汝の体躯を養え 若き日に汝の知能を磨け 若き日に汝の希望を星につなげ」。この理念に基づき古くからの「市民が、身につける教養」あるいは「人間が人間として生きるために必要な教育」としてきたものを現代的に捉えた「現代教養教育」として行われている。つまり、「人間、社会、自然、歴史、世界等に対する幅広い視野をもって世に送り出すこと」を目的とし、体育「身体教育」と英語「語学教育」の二科目が毎年低学年を対象に必修科目として開講されている。本学では、森田らが述べているように、これらの必修二科目について、大学の理念や時代状況に応じた検討を常に行い、多様な体育、外国語教育を展開してきている。

体育科目においては、人間らしく生き生きと生きるためには、まずは心身の健全化が必要と考え「そもそも健康とは？」ということから始まり、「身・心が健全に保てなければ、どのようなになってしまうのか」、「そうならないためには、そうならなかったら」など理論実習を通して「身につけるべき教養」として開講されている。

英語科目では、次のような背景から必修となっている。東西冷戦後のグローバル化のなか、人々は、容易に国境を超え他者や異文化との交流をできるようになった。こうした背景から視野を広く持ち互いの宗教観、世界観を理解し認め合うためには、互いの宗教的、政治的、文化的背景などをコミュニケーション能力と共に学ぶ必要があるため必修科目として開講されている。本学では必修英語4科目（各2単位）を2年間週2コマ（90分）の授業で実施している。内容はコミュニケーションに重点を置いたスキル教育となっている。ただし、英語を通して「様々な宗教的、政治的、文化的背景を学ぶ」点については各担当者に委ねられている、というのが現状であると考えられる。

4. 調査方法

2014年度入学生27名に対して中学・高校時代で学んだ科目について、どのような意識を持っているか選択肢形式および記述式のアンケートを実施した（Fig. 1）。両時代ともそれぞれ「好きだった科目」、「苦手だった科目」、さらに「やり直したい科目」を調査した。選択形式で複数回答可とした。また、「やり直したい科目」については、その理由について記述形式で問うた。中学時代については、国語・社会・数学・理科・音楽・美術・保健体育・技術家庭・英語の9科目、高校時代に関しては、国語・地理歴史・公民・数学・理科・保健体育・芸術・英語・家庭・情報の10科目について調査した。

また、本学での体育および英語に関して学生の意識調査を実施した。それぞれの科目に関して4段階のリッカートスケール（資料1）を用いて「体育／英語の授業は好きですか」、「体育／英語は得意ですか」および「授業と切り離して体育／英語は好きですか」という設問を設定した。また両科目について、中学・高校で学んだことが現在役に立っているか、また将来どのような形で役に立つと考えるかについて、記述式のアンケートを実施した。

なお、調査対象は必修英語上級クラスの学生に対して実施したため、学部内の学生全体の動向には一般化できないことを付記しなければならない。

5. 調査結果と考察

5.1 中学・高校時代で学んだ科目についての意識

まず、中学・高校時代に学んだ科目について、上記の方法でアンケート調査を実施した。

Table 1 に示すように「好きだった科目」については、上位4科目が中学・高校で同じであった。今回の調査対象としている科目（体育・英語）が、この上位科目に位置していることから、この年代での彼らの意識の中では良好に受け入れられているように見受けられる。

次に Table 2 に示すように「苦手な・嫌いな科目」については、上位2教科は変わらないのに対して、中学時代に最下位であった英語が高校時代には上位に入った。反対に体育は、中学時代には中位に位置し、高校時代には最下位となった。特に苦手意識の少なかった中学時代の英語が高校時代に上位に位置した背景として考えられることは、高校に進むにつれて受験英語の要素が強くなるからではないだろうか。以前から、英語の苦手な在学生に聞くと、好きだった英語の授業が受験のための学習にシフトしたこと

をきっかけに、嫌いになったという証言をよく耳にしていた。

最後に「やり直したい科目」については、Table 3 に示すように、高校での英語が数学に次いでやり直したいと回答している。こうした回答の背景には、本学の現行カリキュラムの必修科目（8単位）を反映したものと考えられる。また高校時代の「英語をやり直したい」と回答した理由の代表的なものは、「文法に関する理解を深めたい」というものであった。恐らく、この理由のひとつとして、大学での授業内容に文法事項が増え、発話時等に文法を意識する傾向があるのではないかと推察する。

Table 2 Subjects not good at, at junior and high schools

中学時代			高校時代		
国語	10	18.1%	国語	15	23.8%
数学	9	16.3%	数学	14	22.2%
技術家庭	8	14.5%	地理歴史	10	15.8%
音楽	7	12.7%	英語	9	14.2%
美術	6	10.9%	理科	4	6.3%
保健体育	5	9.0%	家庭	3	4.7%
社会	4	7.2%	情報	3	4.7%
理科	3	5.4%	公民	2	3.1%
英語	3	5.4%	芸術	2	3.1%
			保健体育	1	1.5%
計	55		計	63	

Table 1 Favorite subjects at junior and high schools

中学時代			高校時代		
理科	16	22.5%	理科	19	26.7%
数学	13	18.3%	保健体育	11	15.4%
英語	12	16.9%	数学	9	12.6%
保健体育	10	14.0%	英語	9	12.6%
音楽	9	12.6%	地理歴史	5	7.0%
美術	4	5.6%	芸術	5	7.0%
技術家庭	4	5.6%	家庭	5	7.0%
社会	2	2.8%	公民	4	5.6%
国語	1	1.4%	情報	3	4.2%
			国語	1	1.4%
計	71		計	71	

Table 3 Subjects they would like to do over

中学時代			高校時代		
数学	5	20.0%	数学	11	32.3%
社会	4	16.0%	英語	6	17.6%
理科	3	12.0%	理科	4	11.7%
美術	3	12.0%	国語	3	8.8%
技術家庭	3	12.0%	地理歴史	3	8.8%
英語	3	12.0%	情報	3	8.8%
国語	2	8.0%	家庭	2	5.8%
音楽	1	4.0%	公民	1	2.9%
保健体育	1	4.0%	芸術	1	2.9%
			保健体育	0	0.0%
計	25		計	34	

5.2 大学での体育・英語に対する意識

次に、本大学での体育および英語に関して、学生の意識調査を実施した。それぞれの科目について、4段階のリッカートスケールを用い、中学校および高校で学んだ体育・英語がどのような形で大学の授業に結びついているか、また大学卒業後にどのような方面で役立つと学生は考えているのかの調査を試みた。

5.2.1 体育科目の結果と考察

体育科目に関してリッカートスケールを用い、3つの設問を設定した。また記述式での回答も2つの設問を設定し、「中学・高校で学んだ保健体育で現在役だっていることはなんですか」と「体育科目で学んだことは将来どのようなところで役に立つと思いますか。自由に意見を書いてください」との問いに回答してもらった。

まず「体育の授業は好きですか。」という設問に対して「好き」(4点)、「どちらかといえば好き」(3点)、「どちらかといえば嫌い」(2点)、「嫌い」(1点)で回答を求めた。回答者27名の内12名が「好き」、7名が「どちらかといえば好き」、5名が「どちらかといえば嫌い」、2名が「嫌い」と答えた。平均は3.1であった。

次に「体育は得意ですか」という設問に対して、回答者27名の内4名が「得意」(4点)、11名が「どちらかといえば得意」(3点)、8名が「どちらかといえば不得意」(2点)、4名が「不得意」(1点)と答えた。平均は2.6であった。

また「授業とは切り離して、スポーツをするのは好きですか」という設問に対して、回答者27名の内15名が「好き」(4点)、9名が「どちらかといえば好き」(3点)、1名が「どちらかといえば嫌い」(2点)、2名が「嫌い」(1点)と答えた。平均は3.4であった。

以上のようなことから、「身体教育」を扱う科目(授業)としての体育は、回答者の大半が「好き」、「どちらかといえば好き」と回答しており、履修した授業としては概ね好意的に捉えられているように見受けられる。しかしながら、「得意」、「どちらかといえば得意」との回答が2.6となっていることから、授業において身体活動が伴い「実践」を通した場合は、やや授業としての捉え方がネガティブになっているように見受けられる。恐らくこうした結果の背景には、身体活動の達成度合(パフォーマンスが出来ている・できていない)が、授業内において他者との比較を容易に判断しやすいためではないかと考えられる。例えるならば、クラスで体力テストを行った場合、所要時間や

飛距離のような個人の結果は、瞬時に開示され他者と容易に比較しやすい。

しかしながら、今回の調査では対象となるサンプル数が少ないことから、今後サンプル数を増やし、量的分析を行う必要があると考える。

「授業とは切り離して、スポーツをするのは好きですか」という設問については、回答者の大半(平均3.4)が好意的に回答している。現在、各地に多くの総合型スポーツクラブや、単一種目のスポーツ少年団等が存在し、子供たちは容易に教育機関外でもスポーツに触れることができる。従って、今回の「するスポーツ」への好意的な回答結果は、教育機関がその一助となっているかまでの結論付けは難しく、今後体育科目がこれら結果の一助となっているか否かを詳しく調査する必要があると思われる。

5.2.2 体育科目記述式の結果及び考察

中学校および高校で学んだ保健体育が、「現在の学生生活にどのように役立っているか」、また「大学卒業後の将来にどのように役立つと考えているのか」を、記述式で回答を依頼した。

まず「中学・高校で学んだ保健体育で現在役だっていることはなんですか」の設問に対しては、半数の者が「体調管理・体力づくり」について回答している。他には、運動・スポーツに対してのスキルアップやルールの把握があった。しかしながら、役立っていることはないと回答したものも数名いた。

「大学卒業後の将来にどのように役立つと考えているのか」という設問に対しては、スポーツやチームプレー(集団行動を含む)をツールとして捉え、実社会での必要性を感じ「コミュニケーション力・協調性」をキーワードに将来に役立つと回答したものが5件、スポーツそれ自体を「楽しむ・継続する」といった回答をしたものが5件、続いて「健康管理」に関する回答が3件、日常での緊急時に対応する「応急処置」が3件となった。

今回、調査対象となった学生から上記設問にて得られた回答では、スポーツを生涯にわたり行うための「方法(ルール・スキルトレーニング)」身体活動を通した「健康管理・体力づくり」といった回答が中学・高校・大学を通しての共通したものだった。これは恐らく、回答者たちの実生活上の経験値に基づく回答と考えられる。また、大学卒業後の将来に役立つという設問では、前述の回答に「コミュニケーション力・協調性」といった内容の回答が新たに加わり興味深い結果となった。こうした結果の背景には、学生生活の場において入学以前の人間関係より、さらに多様な人間関係の構築を必要としている環境が学生自身の周囲にあるためではないかと考えられる。特に体育科目内では実習形態を多用しており、授業内においては県内外から生活文化・背景の違う学生たちがひとつの集団となり学習していくため、集団行動を通しての「コミュニケーション

Table 4 Results of the questions on physical education on the Likert scale

授業として好き	得意	スポーツとして好き
3.1	2.6	3.4

Table 5 Results of the questions on English on the Likert scale

授業として好き	得意	外国語として好き
3.1	2.5	3.4

力」が必要となり今回の回答に繋がったのではないかと推察する。

5.2.3 英語科目の結果と考察

英語に関しても体育と同様のリッカートスケールを用いて3つの設問を用意し、また「中学・高校で学んだ英語で現在役だっていることはなんですか」と「英語で学んだことは将来どのようなところで役に立つと思いますか。自由に意見を書いてください」に記述式で回答を依頼した。

「英語の授業は好きですか。」という設問に対して、回答者27名の内8名が「好き」（4点）、14名が「どちらかといえば好き」（3点）、4名が「どちらかといえば嫌い」（2点）、1名が「嫌い」（1点）と答えた。平均は3.1であった。

「英語は得意ですか」という設問に対して同様のスケールでの平均は2.5であった。「得意」と回答した学生は1名に留まり、「不得意」と答えた学生が4名となった。

「授業とは切り離して、英語は好きですか」という設問の平均は3.4と高く英語という外国語に対する心情的なものは肯定的であることが窺える。

5.2.4 英語科目記述式の結果と考察

「中学・高校で学んだ英語で現在役だっていることはなんですか」の設問に対して「書く」以外の3つのスキルに役立った実体験を述べている。大学の授業で役立っているという記述は2件しかなく英語の看板、インターネットの英語記事が読める、英語話者とのコミュニケーションがとれたなど、実際に使えたかどうかを判断基準に用いて報告しているものが大半である。

「英語で学んだことは将来どのようなところで役に立つと思いますか」という設問に対する回答は実用的な成果を想定しているように読み取れる。就職というキーワードを使った回答が15件、旅行および外国人とのコミュニケーションというキーワードを使った回答がそれぞれ6件、留学や将来英語学習を続ける素地になるという回答が1件ずつあった。近年の日本社会における英語学習への期待と本校の必修英語が4技能を中心にコミュニケーションを軸にした教育方針を反映した傾向と考えることができる。

今回調査対象にした学生にとって中学・高校・大学で学んだ英語学習に期待する成果は実生活において役に立った成果（中学・高校）や大学卒業後にコミュニケーションを中心とした英語使用に対する期待、グローバル化が進むと感じ、仕事上での英語使用に役立つという期待を持っている

ことが読み取れる。さらに、観光立国を目指す国策（国土交通省2012）の結果、多くの外国人観光客が訪れるようになった現状や海外での様々な分野での日本ブームなどの現象は、今後日本国内での異文化接触の機会が増えると期待できる。その意味では、英語を使うというスキルの側面だけでなく、異文化理解—様々な宗教的、政治的、文化的背景を学ぶ—という幅広い視野を持つ人格形成に取り組む必要性がさらに英語教育に求められるのではないかと考える。

6. おわりに

今回実施した体育・英語に関する調査は中学・高校でのこの2科目に関する学生の受け止め方を調査することであった。この調査結果をもとに海洋学部在籍する学生が必修科目として設定されている体育・英語についてどのような理解を持っているか、履修を修了した高セメスターの学生に対するアンケート作成につなげることを次の調査目標と定めている。東海大学が必修と設定している思いを学生は共有できているのか、もし、異なる受け止め方をしているのであればそれはどのようなものか。この種の研究は未開発のためアンケートの設問設定については今後試行錯誤が予想される。教育の成果を短期間のうちに測るのは非常に困難であることを念頭に置きながらも、調査を継続させる必要性を強く感じるものである。また、最終的には社会で活躍する卒業生に対してアンケート調査を実施し、東海大学の教養教育の一部である体育・英語教育が彼らの人生にどのような影響を与えているのか、あるいは本大学が提唱する教養教育の目的と卒業生のアンケート結果に隔たりがあるのであればいかにこれからの体育・英語教育を改善すべきなのかを調査・研究する必要があると考える。

文献

- 天野郁夫（2006）：大学改革の社会学。玉川大学出版、東京、182-236 pp.
- 中央教育審議会（2002）：「新しい時代における教養教育の在り方について（答申）」
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/020203.htm（参照日2015年5月28日）。
- 大学審議会（1991）、「大学教育の改善について（答申）」
http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/nc/t19910624001/t19910624001.html（参照日2015年5月28日）。
- 大学審議会（2000）「グローバル化時代に求められる高等教育の在り方について（答申）」
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/old_chukyo/old_daigaku_index/toushin/1315960.htm（参照日2015年5月28日）。
- 国土交通省（2012）「観光立国推進基本計画」

<http://www.mlit.go.jp/kankocho/kankorikkoku/kihonkeikaku.html> (参照日2015年9月1日)

福田博子 (2010) : 大学における教養教育についての考察.
八洲学園大学紀要. 第6号, 19-28.

林正人 (2004) : 大学設置基準大綱化後の共通 (教養) 教育
のかかえる問題. 大阪工業大学紀要. 人文社会篇, 48(2),

13-26.

森田啓・谷合哲行・東山幸司・引原有輝・三村尚央・荒牧亜
衣 (2011) : 教養教育としての体育と外国語教育—領域を
拡大する試み—. 体育・スポーツ哲学研究. 123-137 pp.

寺崎昌男 (2006) : 大学は歴史の思想で変わる—FD・評価・
私学—その先を読む. 東信堂, 東京, 190-200 pp.

要 旨

東海大学海洋学部において設定されている体育および英語について, 学生がこれらの必修科目に対して持つ考え・受け止め方が大学側のカリキュラム編成方針と一致するものか調査・研究する前段階として, 2014年度入学の27名の学生に中学・高校で学んだ科目についてアンケート調査を実施した. 中学・高校における「好きな科目」, 「苦手・嫌いな科目」, および「やり直したい科目」について尋ね, またこれらの科目が大学で履修中の必修科目である体育および英語にどのような影響・効果をもたらしているか4段階のリッカートスケールと記述式のアンケートを用いて学生の認識を調査した. この調査結果をもとにすでに体育および英語科目を履修した高セメスターの学生にこれら2科目に対する認識・理解を調査すべく新たなアンケート作成に繋げていく.

必修科目（体育・英語）に対する学生の意識調査

アンケート

中学で学んだ教科についての質問に答えてください。

1 中学校で好きだった科目は何でしたか？☑を入れて下さい。

☐ 国語 ☐ 社会 ☐ 数学 ☐ 理科 ☐ 音楽
☐ 美術 ☐ 保健体育 ☐ 技術・家庭 ☐ 英語

2 苦手な・嫌いな科目は何でしたか？☑を入れて下さい。

☐ 国語 ☐ 社会 ☐ 数学 ☐ 理科 ☐ 音楽
☐ 美術 ☐ 保健体育 ☐ 技術・家庭 ☐ 英語

3 苦手な・嫌いな科目に☑した中で、もう一度機会があればやり直したいと思う科目に☑を入れて下さい。

☐ 国語 ☐ 社会 ☐ 数学 ☐ 理科 ☐ 音楽
☐ 美術 ☐ 保健体育 ☐ 技術・家庭 ☐ 英語

3 の理由を述べてください。

高校で学んだ教科についての質問に答えてください。

1 高校で好きだった科目は何でしたか？☑を入れて下さい。

☐ 国語 ☐ 地理歴史 ☐ 公民 ☐ 数学 ☐ 理科
☐ 保健体育 ☐ 芸術 ☐ 英語 ☐ 家庭 ☐ 情報

2 苦手な・嫌いな科目は何でしたか？☑を入れて下さい。

☐ 国語 ☐ 地理歴史 ☐ 公民 ☐ 数学 ☐ 理科
☐ 保健体育 ☐ 芸術 ☐ 英語 ☐ 家庭 ☐ 情報

3 苦手な・嫌いな科目に☑した中で、もう一度機会があればやり直したいと思う科目に☑を入れて下さい。

☐ 国語 ☐ 地理歴史 ☐ 公民 ☐ 数学 ☐ 理科
☐ 保健体育 ☐ 芸術 ☐ 英語 ☐ 家庭 ☐ 情報

3 の理由を述べてください。

東海大学では創設者の建学精神に基づいて必修科目を設けています。その中の英語と体育科目について質問します。

【体育科目について】

体育の授業は好きですか。

好き どちらかといえば好き どちらかといえば嫌い 嫌い

体育は得意ですか。

得意 どちらかといえば得意 どちらかといえば不得意 不得意

授業とは切り離して、スポーツをするのは好きですか

好き どちらかといえば好き どちらかといえば嫌い 嫌い

中学・高校で学んだ保健体育で現在の学生生活に役だっていることはなんですか。

体育科目で学んだことは将来どのようなところで役に立つと思いますか。自由に意見を書いてください。

【英語科目について】

英語の授業は好きですか。

好き どちらかといえば好き どちらかといえば嫌い 嫌い

英語は得意ですか。

得意 どちらかといえば得意 どちらかといえば不得意 不得意

授業とは切り離して、英語は好きですか

好き どちらかといえば好き どちらかといえば嫌い 嫌い

中学・高校で学んだ英語で現在役だっていることはなんですか。

英語で学んだことは将来どのようなところで役に立つと思いますか。自由に意見を書いてください。

ご協力ありがとうございました。

Fig. 1 University Student's Perception of their Junior and High School Subjects